

医芸伴壇



青森 朝霧 朝光

お岩木のふところに逃げ稲雀
茸狩にぎやかにして虎視眈眈
秋蝶の神経鈍る日なりけり
茸狩縄文人の貌となり
ふる里の部屋の四角や木の葉鬆

千葉 秋葉 琢磨

一声をあげて夜蟬の落ちにけり
大和路の朝な夕なの爽やかに
室生寺にある国宝と秋の山
草いきれ里の香のして若き日々
新盆や人と人との絆知り

長野 有泉 七種

地の限り空の限りを良夜かな
死は人も時もえらばず虫時雨
はればれと干草に風の吹く日かな
墓だけが残る故郷も豊の秋
露の香に五体おぼるる花野かな

静岡 岩本 漂人

滝近しハクセキレイに迎へられ
青田波キガシラセキレイ見えかくれ
木洩れ日やイワシセキレイ尾を横に
プール開きセグロセキレイ囀れり
欄干にはたと見合わずキセキレイ

東京 小南 丁字

お田植は陛下の固執意義深い
万緑や亀鯉餌を競いけり
蝉しぐれななお涼しげな阿修羅像
宙のショー黒い太陽夏群れり
議席逸す晴耕雨読薄紅葉

東京 篠田 那珈

花木むくげ種咲いて睦まし鳩雀
夫々の産地名しるし梨並ぶ
市川の梨も交りて仏前に
大罪を謝す大臣や終戦日
皆既日食見たと閻魔に報告せん

新潟 中村 雄彦

うなぎ食つ血圧高き者同士
一斉に貝焼く匂キャンプ場
それぞれが鱧寿司手にし汽車を待つ
夏草や疎開は遠くなりけり
また一寸顔つき変り入学す

長野 榎本 勝彦

石蹴つて気がすんだかよつ秋の暮
紅白旗いざ戦わん秋太鼓
香煎こうせんを振舞ふ口下稲田照る
歩もつよよそみしないで穂草波ほくさなみ
リタイヤー 桐下駄鳴りて天高し

兵庫 廣 辻 逸 郎

敬老日胸のぬくもりコアラ抱く
熱帯魚・サンゴに触れて日焼けする
シノーケルサンゴの海の白く深く
山深く踊り子の道柿たわわ
大桶の湯を独り占め秋の雲

東京 初 芝 澄 雄

青空に赤鮮やかにサルスベリ
蝉盛り夏また盛り古里は
里山は今一瞬の紅葉なり
コスモスは日本の花のごとく咲く
完熟の柿に群れ来れ鳥の声



東京 福 富 清 子

東京 福 神 規 子

いしづみに歳月秋の来りけり
ここな里燦岩を垣根に一位の実
かまつかにやつとふんぎりつきにけり
秋深みかもからまつに雨の降り
また強くなりし山雨や男郎花

東京 福 富 清 子

銀河系に住みなし銀河淡きかな
左右の目に秋空いっぱい退院す
蝸牛庵の墓尋ふ径や露時雨
光年の中に吾も在り十三夜
牡丹根分け和尚の話とめどなく

青森 三 上 忠 英

つららかや明日嫁く子と川の字に
主人公眠りこけたる七五三
踊りの輪抜けて踊りを見てをりぬ
文鎮をしかと一筆秋夜長
葱と酒下げて夜道を父か来る

東京 初 木 秀 穂

武蔵野の秋天なりとつべなひぬ
野を行けば暫し道連れ赤蜻蛉
武蔵野の櫻高きに鳥爪
今生のこのひとときの秋日和
武蔵野の林の奥の秋没日

広島 渡 辺 晋 山

音しづか老いし二人の巴里祭
夏の日に散れり九人の桜隊
木洩れ日に揺るる原爆殉難碑
終戦忌シユプレヒコール辻芝居
詞の坂の「悲しき酒」や秋時雨

蛇足 として福富さんから二三

蝸牛庵 幸田露伴の別号。池上本門寺
にお墓があります。

雀化して蛤となる 蛤の貝殻の色や模
様が雀の羽根に似ているところから。

(俳諧に疎い編集氏には勉強になります)